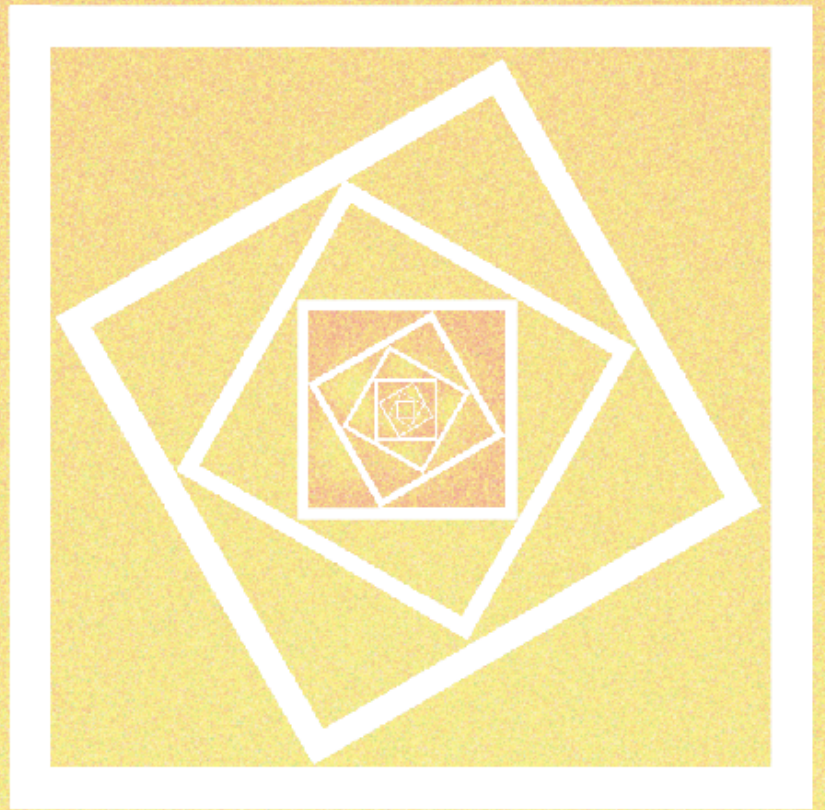


平成 27 年度 文化庁
地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業



スポーツミュージアム連携・啓発事業 シンポジウム

「これからのスポーツ博物館のあり方について」

スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会



平成27年度 文化庁
地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

スポーツミュージアム連携・啓発事業 シンポジウム

「これからのスポーツ博物館のあり方について」

スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会

目次

1. プログラム・・・・・・・・・・ 1
2. 開会挨拶・・・・・・・・・・ 2
3. 来賓挨拶・・・・・・・・・・ 3
4. 趣旨説明・・・・・・・・・・ 4～5
5. 基調講演・・・・・・・・・・ 6～14
6. シンポジウム・・・・・・・・・・ 15～32
7. 特別講演・・・・・・・・・・ 33～38
8. 閉会挨拶・・・・・・・・・・ 39
9. シンポジウム出演者・・・・ 40
10. アンケート結果・・・・・・・・ 41

シンポジウムの目的

スポーツ文化の発信の拠点となるスポーツ博物館の存在意義や、我が国におけるスポーツ博物館の設置意義について、理解を促進する。

期日：平成27年10月10日（土）

入場無料・事前申し込み不要 開場 12:30

会場：東京国際フォーラム G701会議室

内容：

・開会挨拶：13:00～13:05

独立行政法人日本スポーツ振興センター 理事長 大東 和美
(スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会 会長)

・来賓挨拶：13:05～13:10

文化庁 文化財部長

村田 義則 氏

・趣旨説明：13:10～13:20

秩父宮記念スポーツ博物館 学芸員

井上 裕太

1. 基調講演 13:20～13:50

・筑波大学 体育専門学群 学群長(当事業実行委員会 実行委員) 真田 久 氏
「Sprt for All とスポーツ博物館」

2. シンポジウム 14:00～15:20

登壇者

・中京大学 スポーツ科学部 教授(当事業実行委員会 実行委員) 来田 享子 氏

・公益財団法人日本サッカー協会 日本サッカーミュージアム

コミュニケーション部 参事

小野沢 洋 氏

・公益財団法人講道館 図書資料部長

村田 直樹 氏

・国立科学博物館 事業推進部 参与

小川 義和 氏

モデレーター(司会進行)

・筑波大学 体育専門学群 学群長(当事業実行委員会 実行委員) 真田 久 氏

3. 特別講演 15:30～16:00

・九州国立博物館 前館長

三輪 嘉六 氏

「スポーツ博物館設置の重要性、博物館連携について」

・閉会挨拶：16:00

独立行政法人日本スポーツ振興センター 理事

高谷 吉也

独立行政法人日本スポーツ振興センター 理事長 大東和美
(スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会 会長)

このシンポジウムの主催「スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会」の会長を務めます、独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長の大東です。

本日は、ご多忙中のところ多くの方にご参加いただき、心より御礼申し上げます。

さて今年度、独立行政法人日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館・図書館は、文化庁の平成27年度「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択され、「スポーツミュージアム連携・啓発事業」に、取り組んでおります。

本事業の中核館である秩父宮記念スポーツ博物館・図書館について説明しますと、昭和天皇の弟君であり「スポーツの宮様」として親しまれた秩父宮雍仁（ちちぶのみや やすひと）殿下の我が国スポーツ界での御功績を記念し、日本で唯一の総合スポーツ博物館として、旧国立競技場の施設内に1959年1月に開設されました。

半世紀以上にわたり、日本のスポーツの歴史と文化を普及するため、あらゆるスポーツ関係資料の収集・保存・公開を行ってきました。また、併設の図書館では、スポーツに関する各種の貴重な文献と、半世紀以上の雑誌のバックナンバーを所蔵し、一般の愛好者から研究者まで、多くの方に利用されてきました。

現在、博物館・図書館は、国立競技場の改築工事に伴い、長期休館となっておりますが、博物館については、全国の博物館や美術館などへ積極的に資料の貸出を行っております。また、図書館については、予約制で閲覧と複写サービスを再開しております。

さらに博物館は、今年度、新たにスポーツミュージアム連携・啓発事業の中核館として、大学や博物館、関係部署・機関・団体と連携・協力しながら、次の3つの事業を行っております。

1つ目は「地域と連携した日本のオリンピックの歴史を伝える巡回展」、2つ目は「国内外のスポーツミュージアム情報収集」、そして3つ目は「オリンピック資料を後世に伝える人材育成」であります。

本日のシンポジウムのテーマは「これからのスポーツ博物館のあり方について」となっておりますが、これは1つ目の巡回展事業と連動した企画となっております。

現在、和歌山県では「秩父宮記念スポーツ博物館巡回展」が開催されております。巡回展は和歌山のほか、年明けには宮城県でも開催する予定となっております。また、次年度以降も札幌や岩手などで開催する予定です。

秩父宮記念スポーツ博物館・図書館は、これらの巡回展を通して、全国の方々にオリンピック資料を紹介し、知っていただいたり、興味を持っていただく機会を提供し、2020東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成に向けて様々なスポーツの魅力を発信したいと考えております。

本日のシンポジウムが私どもの秩父宮記念スポーツ博物館・図書館をはじめ、全国にあるスポーツミュージアム全体の存在価値を高め、揺るぎなき地位を築く一助となり、また、ご参加いただいた皆様の理解を深める場となることを期待いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

皆様こんにちは。ご紹介を賜りました文化庁文化財部長の村田でございます。

本日は、スポーツミュージアム連携・啓発事業が、こうして大勢の皆様のご出席のもとに行われますこと、心からお喜び、お祝いを申し上げます。ご来場の皆様の中には、なぜ同じ文科省の組織でスポーツ庁ではなく文化庁の部長が挨拶に来ているのか、不思議に思われる方がいらっしゃるかと思いますので、少しお話をさせていただきます。

先ほど理事長からもお話があり、またご案内の中にも左下に文化庁のロゴと事業名を入れていただいておりますが、この事業は文化庁が今年から開始した「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」という枠組みで、お手伝い・支援をさせていただいております。

この「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」ですが、狙いとしては、様々な美術館・歴史博物館が地域の核として文化の発信を牽引し、文化芸術立国の実現に資するという事で、地域の博物館・美術館を多く活用していただき、地域の創生、あるいは新しい文化の発信に役立てていただこうと、文化庁として今年から始めた事業でございます。

スタートの年である本年度 27 年度は北海道から沖縄に至る 94 団体に対し、総額 9 億円ほどの支援を行わせていただいております。

その中で、このスポーツミュージアム連携・啓発事業でございますが、先ほどのお話にありましたように、秩父宮記念スポーツ博物館を中核館とする実行委員会の皆さんが主体となり、我が国におけるスポーツ資料の全国的な調査やアーカイブ化、全国各地でスポーツ資料を所蔵する機関との

連携、そして人材育成に努められると伺っております。この事業の実施は、何よりもスポーツを文化として位置づける、あるいはスポーツ資料を文化的資料として位置づけながら、体系的な把握と公開を通じて 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた理解増進に繋げるということで、私どもも大変注目をしております。

2020 年に向け、スポーツ界は当然ですが、文化庁としても日本の文化を世界に向けて発信する、それを機に国民の皆様が芸術文化に親しんでいただき、日本を訪れる大勢の外国の方に日本の芸術文化を積極的に発信していきたいと考え、スポーツの祭典ではなく文化プログラムとして 2016 年から 2020 年に向けて大規模な芸術文化発信をしようと、文化庁だけでなく芸術文化団体や地域の様々な団体、地方自治体と協力しながら 2020 年を盛り上げるため、現在、企画をしているところでございます。

このスポーツミュージアム連携・啓発事業は、スポーツと文化の架け橋という意味でも、私どもとしては大変期待をし、楽しみにし、一緒にぜひ盛り上げたいと考えております。

そういう意味で、本日のこのシンポジウムは、2020 年に向けて文化とスポーツが一緒になってこの国民的な祭典を盛り上げていく、大きな第一歩となるものと考えております。このシンポジウムが実り多いものであることを祈念し、また、この事業が素晴らしい成果を収められることを心から祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

秩父宮記念スポーツ博物館・学芸員の井上裕太です。

現在、秩父宮記念スポーツ博物館では、「スポーツミュージアム連携・啓発事業」として、「日本のオリンピックの歴史を伝える地域と連携した巡回展事業」、「国内外のスポーツミュージアム情報収集事業」、「オリンピック資料を後世へ伝える人材育成事業」を実施しています。まず、これらの事業の取り組みについて紹介いたします。

巡回展事業は、地方において1964年の東京オリンピック・パラリンピックのレガシーを伝え、また博物館資料を通じてスポーツの魅力を発信することを目的に、今年度は、国民体育大会の開催地である和歌山県と、東北復興の一助となるよう宮城県で開催します。

現在、和歌山県で開催中の「秩父宮記念スポーツ博物館巡回展—2020年東京オリンピック・パラリンピックがやってくる—」では、当館の所蔵する1964年の第18回東京オリンピックの資料を中心に、日本が初めて参加した1912年の第5回ストックホルム大会から、2020年の東京オリンピック・パラリンピックへと続く、オリンピック・パラリンピックの歴史を紹介する展示となっています。

歴代のオリンピック参加メダルから、パラリンピアンが実際に使用している義足に至るまで、オリンピック・パラリンピックに関するあらゆる資料を展示しています。また、表彰台の上へ乗り、本物のオリンピック金メダルを首からかけて写真撮影を行う、メダリスト体験も行っております。和歌山会場では、現在1日あたり、約150の方が来館しており、子どもからお年寄りまで、多

くの方に好評を得ています。

次年度以降も、国民体育大会開催地、スポーツの国際大会開催地などを中心に巡回展を予定しており、スポーツの魅力や文化の発信に努めたいと考えています。

続いて、情報収集事業について紹介いたします。この事業では、スポーツ文化を世界へ向けて発信するための拠点づくりや関係機関とのよりよい連携を検討できるように、国内外の調査を行います。

国内のスポーツ資料収集の実態調査では、オリンピック開催都市であった札幌市の札幌ウィンタースポーツミュージアムと、長野市のエムウェーブ内の長野オリンピック展示コーナーについては、現地視察を終えています。両施設ともオリンピックのレガシーを後世に伝える施設として機能していることが分かりました。また、国内のスポーツ資料がどこにどのような形で現存しているのかを把握し、我が国の今後のスポーツ資料の活用や保存のあり方を検討するため、約600箇所のスポーツ博物館や体育学科のある大学図書館などに対してアンケート調査を実施する予定です。

海外調査では、まず、スポーツ博物館のネットワーク構築の先進的な取り組みとして海外に存在するOlympic Museum Networkの実態を調査するため、Olympic Museum Networkに加盟しているカナダ・バンクーバーのRichmond Olympic Experienceの視察を行い、そこで開催されたOlympic Museum Networkの総会にオブザーバーとして参加しました。このほか北京・天津、ロサンゼルス事例についても視察調査を行います。

また、海外における国立のスポーツ博物館として、オーストラリア・メルボルンのクリケット競技場内

に開設されている National Olympic Museum を視察し、スポーツの歴史を伝えていく国の文化的な拠点として、どのように機能するべきなのかを調査いたします。

最後に、人材育成事業の紹介をいたします。国内に現存するスポーツ資料を、スポーツレガシーとして後世へ確実に伝えていくためには、専門知識を有する人材の育成が必要です。また、当館が収蔵しているオリンピック資料を、研究・教育などで広く活用いただけるよう 3D デジタル化やデジタルアーカイブ化を行うことも重要だと考えます。そこで、中京大学の協力を賜り、オリンピックに関する資料のデジタル化や目録作りを行い、これらの資料を今後どのように活用すべきなのか検討したいと考えております。

まず、スポーツ資料の 3D デジタル化についてですが、今年度は中京大学所蔵のメダルを利用した 3D スキャナーによる計測テストを実施しました。今回のテストにより、機材の精度を見極め、今後の 3D デジタル化に向けた参考材料にしたいと考えております。

次に、1964 年東京オリンピックの文書資料のデジタルアーカイブ化についてですが、秩父宮記念スポーツ博物館が収蔵する大会運営に関する会議資料や日記、レターについて、PDF でのデジタル化と目録作りを行います。

大学の学芸員資格取得課程との連携により、スポーツ資料を扱う専門家を育成するとともに、これらのデジタルアーカイブ資料の活用について、関係機関の協力を得ながら検討したいと考えております。

2019 年には、京都市で第 25 回世界博物館大会（通称、ICOM 2019）が開催されます。2020 年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。今後、博物館やスポーツ文化が世界の注目を集めると予想される中で、当館でもただいま紹介させていただいたような事業の実施により、地

域連携、ネットワーク構築、博物館教育を推進し、スポーツ博物館の役割を果たしていきたいと考えております。

以上を踏まえ、本日のシンポジウムでは、今後のスポーツ博物館のあり方について、各界の専門家を交え議論したいと考えております。

スポーツ史がご専門の筑波大学の真田久（さなだ ひさし）先生、同じくスポーツ史がご専門の中京大学の来田享子（らいた きょうこ）先生、そして秩父宮記念スポーツ博物館と同様に博物館資料と図書資料の両方をお持ちのサッカーミュージアムの小野沢 洋（おのざわ ひろし）様、同じく資料館と図書館の両方をお持ちの講道館の村田直樹（むらた なおき）様、サイエンス・コミュニケーションや博物館教育などがご専門の国立科学博物館の小川義和（おがわ よしかず）様、そして九州国立博物館の前館長の三輪嘉六（みわかろく）様という 6 名の方々にご登壇いただき、それぞれのお立場から、スポーツ文化の発信の拠点となるスポーツ博物館の存在意義や、わが国におけるスポーツ博物館の設置意義などについてお話しいただきたいと考えております。

今回のシンポジウムをきっかけに、一人でも多くの方にスポーツ文化について興味を持っていただければ幸いです。

以上で趣旨説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

筑波大学 体育専門学群 学群長 真田 久
 (スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会 実行委員)

筑波大学の真田でございます。「Sport for All とスポーツ博物館」というテーマで、話をさせていただきたいと思います。

この趣旨は、1つ目は人類が多様なスポーツを持っていたということ、2つ目は人の生涯、生きて成長して大人になって年を取り、時には病気になり、やがて命を終えていくという、そのサイクルの中でスポーツといろんなかわり方があるのだということ、3つ目はそうした人の立場からスポーツというものを捉え直していく、そのような展示というものを考えられたらいかかなと、そういう提案も含めてお話をさせていただきたいと思います。

人類史における多様なスポーツ

そもそも「Sport」という言葉がいつ頃できたのか。語源を遡りますと13～14世紀頃の中世英語まで遡ります(図1)。ラテン語からきている訳ですが、そのときはdesportやdeportと言いまして、義務からの気分転換、あるいはそれから派生した様々な娯楽、これを全てこの言葉で示していました。

それが15～16世紀になりますと、気晴らし、娯楽、そして戸外の運動というものが入ってまい

ります。17～18世紀になりますと、今度は狩猟ですね。鷹狩りも含めて、ハンターたちが出かけていって動物、獲物などをとるといふ、これがsportという言葉で使われていくようになります。イギリスなどでこの頃に出されたスポーツの百科事典があるのですが、90%以上はハンティングの内容なんです。銃の説明、どういう動物が獲物になるか、どうやって捕まえるかということが、フィッシング(釣り)も含めて、非常に細かく書かれてあります。言ってみれば、それがスポーツであったということでもあります。ツルゲーネフの『獵人日記』という小説の英語名は『A Sportsman's Sketches』スポーツマンの日記なんです。日本では獵人(ハンター)と訳したのですが、それがスポーツマンであったということなんです。

その後、19世紀になり、競技としての戸外のゲーム、フットボールや陸上競技、少し遅れませんが水泳など、そのようなものがスポーツとなってくるのは実は19世紀に入ってからということなんです。つまり今、私たちがイメージするスポーツというものは、まだ200年ぐらいのものだということなんです。オリンピックに至っては、1896年が第1回でありますから、まだ百数十年ですね。そう考えますと、スポーツという語源から見ると、オリンピック・スポーツあるいは国際スポーツというのは、人類の歴史から見たら、ほんのその一部に過ぎなかったということが言える訳であります。

古代社会における多様なスポーツ

古代社会、スポーツという言葉がない時代、紀元前の時代、このときにスポーツはなかったのかといいますと、そんなことはありませんでした。スポーツに匹敵する様々な活動は娯楽も含めて、たくさん行っております。

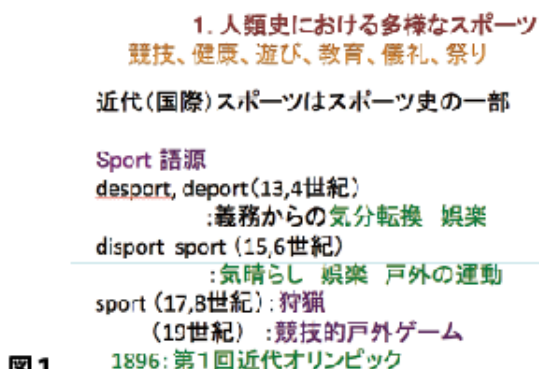


図1

例えば、これ(図2)はクレタ島の牛跳びのレースなんですが、走ってくる牛に前から飛び乗って背中の上を一回転して下りるといふ、曲芸のような競技なんですね。牛は非常に人間に対して様々な恩恵を与えてくれるといふことで、大事な動物でありました。そういう牛と人間との関係の深さもこの絵は示しているのですが、それをこういう競技、様々な競技として紀元前1500年頃に行っていたといふことであります。

古代社会においても多様なスポーツ



図2 クレタ島の牛跳び:紀元前1500年頃のクノッソス宮殿の壁画
有田正高(2014)著、2006『異国スポーツの歴史』(世界スポーツ史へのアプローチ)414頁(上)、大修館書店(『歴史文化大事典スポーツ』監修版参照)

同じ頃、これ(図3)もギリシャの一部ですが、サントリーニ島でボクシングをやっている壁画が見つかっております。見て分かりますようにグローブをつけています。明らかにボクシングをやっております。こういう格闘技としてのスポーツが紀元前から既に行われていたといふことであります。



図3 ボクシングをする少年たち:紀元前1500年頃のサントリーニ島の壁画
有田正高(2014)著、2006『異国スポーツの歴史』(世界スポーツ史へのアプローチ)414頁(下)、大修館書店(『歴史文化大事典スポーツ』監修版参照)

では、エジプトではどうだったのかといひますと、これ(図4)は「平均運動と回転競技」と書いてありますが、左側のほうは人が真ん中に立って、両手に人を持ってぐるぐる回っていると解釈をさ

れている図柄なんですね。右側のほうは、肩の上を人が歩いて移動するといふことで、これは祭りの一部を描いている図であろうといひられております。これは紀元前2250年頃の壁画です。



図4 平均運動と回転競技:紀元前2250頃のエジプトのレリーフ
大谷和夫(1977)『エジプトの美術』(エジプトの歴史と文化)174頁(下)、大修館書店(『歴史文化大事典スポーツ』監修版参照)

こちら(図5)は「ハトシェプスト女王のセド祭」といひまして、紀元前1480年頃です。セド祭は何かといひますと、国王、この場合は女王ですが、即位して30年目に行ひます。何をするかといひると走るんですね。女王が走っています。何故走るのか。私はまだこの国の女王たり得るだけの力を持っている、といふことを家臣たちに見せるのですね。それを見て、まだ王様でいられるといふことになる訳です。ここでへばってしまうと、いつ殺されてもおかしくないといふことになるそうでした、そういう儀礼として国王が走るといふことが古代のエジプトでは行われておりました。世界最古の競技場も、実はエジプトで見つかっています。セド祭のためのランニング場といふものも、発見されておりました。



図5 ハトシェプスト女王のセド祭:紀元前1480年頃のエジプトのレリーフ
大谷和夫(1977)『エジプトの美術』(エジプトの歴史と文化)174頁(下)、大修館書店(『歴史文化大事典スポーツ』監修版参照)

やはり古代でもハンティングは非常に盛んでして、こちら（図6）はツタンカーメン王のライオン狩りの場面であります。王自ら馬車に乗って、弓を引いてライオン狩りをするという、これは当時の王侯貴族にとって一番の娯楽でありました。



図6

ツタンカーメン王のライオン狩りの場面：
紀元前1340年頃のエジプトの彩色画

AD1740年、スワズン、ブエニハ、海口、李慶遠、林、1976年、エジプトの美術、ソコト、
メソポタミアの美術、1976年、エジプトの美術、ソコト、

一般の兵士たちの間でも、様々なスポーツが行われており、これ（図7）は葦の茎を使ったフェンシングです。ということは、真剣ではないということですので、明らかにスポーツ的な要素を持って行われていたということが言える訳です。こういう兵士たちのフェンシングもいろんな形で行われており、それが現代にも受け継がれて、棒を使った競技というものが、エジプトでは今日でもいろんなところで見ることができます。こういう古代の様々なスポーツというものが継承されている訳です。



図7

葦の茎を使ったフェンシング：紀元前1370年頃のエジプトのレリーフ

AD1740年、スワズン、ブエニハ、海口、李慶遠、林、1976年、エジプトの美術、ソコト、
メソポタミアの美術、1976年、エジプトの美術、ソコト、

これ（図8）は沼地での狩りの場面ですが紀元前1410年頃です。沼地の様々な生き物を捕獲している様子が描かれています。これも一般の人々にとって非常に人気のある娯楽の1つだったので、こういう絵はたくさん見つかっています。ギリシャでも、あるいはメソポタミア文明でも、こ



図8

沼地での狩りの場面：紀元前1410年頃のエジプトの壁画

AD1740年、スワズン、ブエニハ、海口、李慶遠、林、1976年、エジプトの美術、ソコト、
メソポタミアの美術、1976年、エジプトの美術、ソコト、

うした壁画が出てきております。

これ（図9）はイランですが、帝王のイノシシ狩りです。6～7世紀頃ですが、やはり王侯貴族によるハンティングはずっと受け継がれて、今日にも受け継がれていくこととなります。18世紀のスポーツの中心は狩猟だったということも、こういうところからずっと流れて受け継がれてきたということが言えるかと思えます。



図9

帝王の野猪狩り：6～7世紀頃のイランのレリーフ

AD1740年、スワズン、ブエニハ、海口、李慶遠、林、1976年、エジプトの美術、ソコト、
メソポタミアの美術、1976年、エジプトの美術、ソコト、

レスリングはいろんな地域で様々な形で行われていました。イランの細密画（図10）ですが、レスリングをやっている様子と、周りで観客が見ているということで、これも非常にスポーツ的な要素が組み込まれて行われていたということが言える訳です。非常にきれいな色が施されて描かれているのが、よく分かります。芸術とスポーツがいろんな形で結びついているということが言えるかもしれません。



図10

王宮でのレスリング：
15～17世紀頃のイランの細密画

AD1740年、スワズン、ブエニハ、海口、李慶遠、林、1976年、エジプトの美術、ソコト、
メソポタミアの美術、1976年、エジプトの美術、ソコト、

生活に密着したスポーツ

こうしたスポーツは、その地域の生活の様々な価値観と結びついて行われてきたという面もあります。

左側（図 11）はオランダの運河がたくさんある地域です。「キャナルジャンプ」と書きましたが、運河を飛び越える、そういうレースを行っているところなんです。もともと日常生活でこういう生活をしている訳ですが、何かの記念日のときに、みんなで運河越えを行い、どのくらい距離を飛ぶことができるかということを競い合う訳です。失敗するとそのまま運河に落ちてしまうということになります。

右側はイヌイットのトランポリンと言われており、かつてはエスキモーと言われていた民族であるイヌイットたちが、アザラシの皮を広げて両方を一斉にぴんと引っ張ると、その反動でジャンプできる訳です。ジャンプをして獲物のアザラシが来ているかどうか見回すというものだったのですが、これがスポーツ化されていき、年に何回か行われる競技会の時に高さを競い合う、アザラシの皮でどのくらい飛べるかということを競い合う、そのようなスポーツへとなくなりました。これらはその土地の人々、地域の人々の生活の様々なところから生まれ出ていったスポーツということが言えるかと思います。

生活に密着したスポーツ



図 11

キャナルジャンプ
新編正徳（徳川）朝、1998『国際スポーツの歴史「伝統スポーツ史」へのアプローチ』
p.76-226、大修館書店（松本宮記念スポーツ図書館所蔵）

イヌイットのトランポリン

東アジアに目を向けても、様々なスポーツ的活動が行われていました。これ（図 12）は明代の

蹴鞠です。FIFA が作ったサッカーの歴史の映像では、東アジアのサッカーのルーツの 1 つであるということで、中国の蹴鞠、日本の蹴鞠などが紹介されていたかと思います。



図 12

明代の蹴鞠図
1609年（万暦37年）の
刻本『三才図会』の絵

『三才図会』の蹴鞠の図、1609年（万暦37年）の刻本『三才図会』の蹴鞠の図、1609年（万暦37年）の刻本『三才図会』の蹴鞠の図

これ（図 13）は日本の蹴鞠です。これは秩父宮記念スポーツ博物館に所蔵されている資料ですが、このような装束を着て、そして鞠を蹴る。この時に、ただ蹴るだけではなくて歌を詠むということも行われておりました。



図 13

蹴鞠装束と蹴鞠

（秩父宮記念スポーツ博物館 所蔵資料）

こちら（図 14）は力石（ちからいし）というものです。神社などに行きますと今でもこういうものが置いてあるところもあるかと思いますが、この力石は江戸時代にあちらこちらで行われておりました、43貫（約 161 キロ）の石を誰が持ち上げたということが、ここに書かれてある訳です。こういうものも、まさに庶民のスポーツとして日本でも行われていたということが言えるかと思います。



図 14

江戸時代の力石
（長×幅×高）：43貫（約161kg）
（秩父宮記念スポーツ博物館 所蔵資料）

もちろん相撲も、奉納相撲を含め、いろいろと行われておりました(図15)。



江戸時代の相撲人形
(秋久宮記念スポーツ博物館 所蔵資料)

図15

これ(図16)は流鏝馬(やぶさめ)です。馬に乗って走りながら的を射するという、こういう流鏝馬も行われていました。これも立派なスポーツと言えるものだと思います。



武田流・流鏝馬
(公益社団法人スポーツ振興会 所蔵資料)

図16

これ(図17)は近世における日本の遊びです。羽子板、それから毬杖(ぎっちょう)、これはポロのようなものですが、手に棒のついたホッケーのようなものを持って、丸い球を打つという事が行われております。お正月の風景の1つとして描かれたもので、いろんな遊びが描かれております。庶民も含めて、いろんなことを楽しんで行っていたということです。



羽子板や毬杖の遊び
昭和50年代「お正月の風景」の1つとして描かれたもので、庶民も含めて、いろんなことを楽しんで行っていたということです。

図17

こちら(図18)は福島県の相馬野馬追(そうまのまおい)の様子ですが、右側は甲冑競馬(かっちゅうけいば)と言いまして、先祖代々伝わる鎧兜を着て競馬のレースをします。非常に勇壮なレースで、私も何回か見に行っておりますが、旗指物(はたさしもの)を差して競馬を行うというものです。左側は神旗争奪戦(しんきそうだつせん)と言いまして、神社のマークが入った旗を打ち上げて、それをみんなで敵将の首と思って取り合うという様子であります。戦国時代に戻ったかのような様相を含めていますが、これも彼らの言い伝えでは鎌倉時代以降、ずっと行われてきたということでもあります。

相馬野馬追



図18

神旗争奪戦

甲冑競馬

これ(図19)はインドのポロなんです、馬ではなくてラクダを使って行っている、そういうポロの1コマです。地域によって、様々なものを使ってスポーツが行われていたということです。

以上が、人類の歴史を見ると、いろんなところで多様なスポーツが、スポーツと名がつく前から行われていたということで、このようなことも新しい博物館で展示ができれば素晴らしいかな、というふうに考えた次第であります。



図19

ラクダのポロ:インド・ラジャスタン州

2010年10月撮影。2011年「インド・ラジャスタン州のスポーツ文化」展。スポーツ博物館。 (公益社団法人スポーツ振興会 所蔵資料)

人の生涯とスポーツ

次に今度は人の生涯からスポーツを見てみようということですが、まず子供たちは走ったり、砂遊びをしたり、鬼ごっこをしたり、それから学校に入れば運動会などもあり、体育の授業でいろいろなスポーツ教材が行われます(図20)。

2.人の生涯とスポーツ

(子ども)走る、砂遊び、鬼ごっこ
学校体育で様々なスポーツ教材、部活動、スポーツ少年団



図 20

その一方でスポーツ少年団に入れば、いろんなスポーツも一緒に行われるということです。例えばラグビー教室ですね(図21)。



図 21

大畑大介さんのラグビー教室
写真提供: 埼玉県立川口高等学校 体育センター 広報室

プロの人に教わるという機会もあるかと思えます。これ(図22)は柔道教室ですね。谷本さんが教えていますが、様々なところで子供たちがこうやってスポーツに接していくということです。



図 22

金メダリスト谷本歩実さんの柔道教室
写真提供: 埼玉県立川口高等学校 体育センター 広報室

学生になりますと、運動部に入ればいろんなスポーツ活動が待っていて、そこではインカレを目指し、あるいはユニバーシアードを目指して頑張る学生も沢山いる訳です(図23)。

(学生) 運動部活動、インカレ、ユニバーシアード



図 23

社会人になって成人していくと、地域の様々なスポーツクラブがあり、レクリエーションとしていろんなスポーツに親しんでいくかと思えます。これ(図24)は大阿蘇の元気ウォークということで、ウォーキング大会の様子であります。

(成人): 地域スポーツクラブ、レクリエーション



図 24

大阿蘇元気ウォーク
熊本県阿蘇市で行われたウォーキング大会
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター 広報室

更に年を取って高齢者になっても、健康、あるいは様々なネットワーク、人と人のつながりを目指してスポーツ活動が行われている訳です(図25)。高齢者向けの体操教室、あるいは社交ダンスなども含めて、いろんなところで盛んに行われています。

(高齢者): 健康、つながり



図 25

高齢者向け体操教室
※0J体操や介護予防体操など
高齢者向け体操教室の種別
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター スポーツ振興事業部

そのほか、ファンラン DAY などが催されたり (図 26)、世代を追っているような形でスポーツに私たちは関わることができる訳です。いろいろなスポーツの価値と関わって私たちはスポーツを行っていくことができる訳ですね。そういう人の一生を見た時に、いろいろな関わり方ができる。



図 26

人の側から創造するスポーツ

同時に、今度は人の側からスポーツを変えていく、イノベーションしていく、こういう視点もあるかと思うんです。例えば、これ (図 27) はパラリンピックなどの例ですが、バレーボールですね。これを真似てといいますか、障害のある人にもできるようにということで、シットイングバレーですね。特に下半身に障害のある人に対しては、シットイングバレーという形でバレーボールの形を変えていくことができる訳です。シットイングバレーはロンドンやリオの学校でも非常に盛んに学校教育の中で取り入れられています。健常者も障害のある人も一緒にできるということで、非常に教育的な効果も高いということで取り上げられていました。

3. 人の側から創造するスポーツ



図 27

バレーボール

シットイングバレー

バレーボールが出てきたので、それに近い民族的なスポーツとして、これ (図 28) は東南アジアで非常に盛んなセパタクローです。手でパスをするのではなく、足で蹴って相手のコートに入れるという、セパタクローのほうが歴史は遥かに古いのですが、このように多様なネットを使ったスポーツが行われているということです。

セパタクロー



図 28

それから、クロッカーからゲートボールが生まれていったと言われておりますが (図 29)、高齢者に適したスポーツとして、より安全で簡単にできる、そのようなスポーツというものがこうやって創り出されていったということの例であります。

クロッカー → ゲートボール



図 29

クロッカー
(日本クロッカー協会ホームページ)

ゲートボール
【図説スポーツの歴史】p.244

こちら (図 30) はバスケットボールから車椅子バスケットボールに変わった例です。やはり障害のある人のために普通のバスケットボールではなく、車椅子を利用したバスケットボールというものに、ある面イノベーションされていったということが言えるかと思います。

バスケットボール → 車イスバスケットボール



バスケットボール



車椅子バスケットボール
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター スポーツ医務事業部

図 30

これ(図31)はサッカーとブラインドサッカーですね。目が見えない人々のためにボールを工夫して音が出るようにして、そしてルールもいろいろと変更して、目が見えなくてもサッカーができるようにしていく。これはまさに人々の様々な状況・条件に応じて、スポーツのありようというものを変更していったということだと思います。

サッカー → ブラインドサッカー



図 31



ブラインドサッカー
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター 広報室

また同時に、障害のある人々に対して、様々なスポーツ教室なども行われていくようになっていきます(図32~33)。



パラリンピアン大日方邦子さんのスキー教室
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター 広報室

図 32



パラリンピアン大日方邦子さんのスキー教室
写真提供: 独立行政法人日本スポーツ振興センター 広報室

図 33

スポーツの有りようは変化する

スポーツの有りようは、様々に変化をする。これ(図34)は綱引きなんですが、右上は小学校の運動会での綱引きです。運動会になれば必ず綱引きが行われ、あるいはPTAとして参加されたことがあるかと思います。

左側は秋田県の刈和野(かりわの)地域で行われている大綱引きです。これも江戸時代からずっと行われておりまして、2月10日、もとは小正月の夜に間もなく春が来るというときに、雌綱と雄綱を合体させて6,000人規模の綱引きが行われています。これは雄綱と雌綱が合体するということで豊作が約束される。このような意味合いを込めて行われるのですが、そういう意味合いの綱引きというものが、実は日本各地で行われている訳です。

右下は被災地域における運動会での綱引きです。津波で街が破壊され、学校の周りも大変な状況になって瓦れきが積まれているのが分かります。しかし、確かこれは2011年の6月か7月だったと思いますが、運動会を思い切ってやろうということで、この中で幾つかの種目が行われました。復興という思いをかけた運動会ということで、それぞれ意味合いが違ってくる。人々の視点から見ると、同じ綱引きでも実はいろんな特徴と顔が見えてくるということだと思います。

人々の状況によりスポーツの有りようは変化



刈和野大綱引



小学校の運動会での綱引



被災地域における運動会での綱引き

図 34

これ(図35)は野球ですが、左側は日本における学生野球の試合です。右側は台湾のプロ野球ですが、東日本大震災の後、「頑張れ!日本」と応援のために

野球の試合を行ったということで、チャリティーの野球の試合ですね。これも、やっている人の立場からすると、おそらく普段の野球とは違う価値を持った野球だったのではないかと感じる訳です。

野 球



図 35

日本における学生野球

台湾におけるプロ野球

ということで、以上で、私の拙い話でありましたが、終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

まとめ: 人間の側からのスポーツの展示

人類史上多様なスポーツがある

生涯を通じてスポーツは人々に意味がある

人間の側からのスポーツのありようを考え、イノベーションをはかり、または創造する



Sport For All の進化と深化

まとめ

以上から、人類史上、多様なスポーツがあったということです(図 36)。決して国際スポーツ、オリンピック・スポーツだけではなく、いろんな価値を持ったスポーツが、恐らく人類の誕生と同時に行われていたのだろう。ということは、これはまた人間とスポーツの関わりの深さを想起させると思うのです。

人間の一生、生涯というものを通じて見ていくと、やはりそれぞれの段階に応じていろんなスポーツの意味合いというものがああり、そこに私たちは関わっていくことができる訳です。さらに、人間の側からのスポーツの有りようというものを考え、イノベーションを図っていく、新しいスポーツを創造していく。障害のある人、高齢者のためのスポーツも、これまでのスポーツとは関係なく、どういうスポーツが適しているのかということを考えて、それを創造していく。それを促すような、そういうスポーツ博物館というものができたら、これはおそらく全ての人々に対して、いろんな人々に対してスポーツの恩恵を与えていくことができる。これはそのまま、Sport for All の進化と深化につながっていくのではないかと、こんなふうに感じました。